

20年ぶりのバンコクで感じたこと（2018（平成30）年8月）

カセサート大学は、タイ有数の名門国立大学であり、栄養学をはじめ本学と類似の分野で、様々な先進的取組を進めていることから、本学では今年1月に、同大学と大学間学術交流協定を結びました。こうした中、具体的な友好交流事業の推進に向けた協議等のために、8月に同大学を訪問する機会を得ました。



同大学は、首都バンコクの北の郊外に立地しています。私にとっては、約20年ぶりのバンコク訪問となりました。バンコクの東郊にある、2006年開港の現在のスワンナプーム国際空港の利用は初めてでしたが、バンコク市内まで列車で気軽に移動できることに、正直とても驚きました。以前はバンコクの北郊にあるドンムアン国際空港の利用でしたが、当時はタクシーや専用車の利用が一般的であり、悪名高かった「大渋滞」にはほぼ毎回間違いなく捕まっていました。

市街地に入ると、まさに驚きの連続です。基幹道路の上には高架鉄道が、そして地下には地下鉄が、それぞれ2路線ずつ走っていました。私の記憶する限り、20年前にはこれらはまったく無かったことから、隔世の感があります。実際に、空港鉄道を含めたこれら3種類の列車に乗ってみましたが、大変快適でした。現地の物価からすると運賃が若干高いように感じたことと、混雑が激しいことは少し残念でしたが、車を利用して大渋滞に巻き込まれると移動時間が見通せないことや、暑い中を歩いて目的地に向かうこと等を考えると、列車利用の方に断然軍配が上がります。

多くのお洒落な建物や商業施設などにも驚きました。統計によりますと、タイ全土の1人当たりGDPは、この20年間で名目で3倍、実質で2倍になっています。またタイでは地域格差が極めて大きく、豊かで更なる発展へのエネルギー溢れるバンコクは、地方を中心とした貧しい地域との間に、10倍、20倍もの経済格差があるそうです。そのためオフィスやマンション用の高層ビルが林立し、高級デパートや巨大ショッピングモール、豪華レストランなどもたくさん見掛けました。20年前には、ローカル食堂を中心に賑わっていましたが、現在は選択肢がとても多様になっていると感じました。それは、世界的

に有名なアイスクリームやコーヒーのお店に若者が集まっている隣で、昔ながらの「地元食」の屋台に行列ができていたことでも明らかでした。

当然のことながら、バンコクでは、「国際化」も以前に比べて著しく進んでいました。私が、列車の乗換方法がよく分からずにまごついていると、何人かに英語で声を掛けていただきました。切符の購入時や駅や列車での表示、車内の案内なども英語対応であり、我が岡山の現況を振り返ってみて、少し恥ずかしくなりました。

今回私が最も驚いたのは、20年前に比べてタイ在住の日本人が2倍以上に増えていることでした。理由としては、企業進出の中国からのシフト、以前に比べて日本人が衣食住であまり困らなくなったこと等が上げられるようです。日本食についても、多様な種類のお店を至る所で見つけることができました。

カセサート大学では、長年継続されている「岡山大学との学生交流研修」も見学させていただきました。カセサート大学の農学部など5つの学部が協力して、特別講義や学生同士の討論、両大学の学生からの提案の発表、外部施設の視察や実習などを約1週間かけて行うものでした。すべて英語で実施されるため、訪問前の事前準備の段階から、既にかなり大変な研修プログラムだと言えます。研修内容もさることながら、日本とタイという異なった文化や価値観、歴史、習慣、マナー等を持つ若者同士が、しばらくの間直接向き合うのですから、そのストレスは半端ではないと思われれます。しかしながら、それらを乗り越え、お互いが相手を理解して評価し、信頼し合い、新たな友達として次第に仲良くなっていく、というプロセスは、参加した学生にとって、本当に貴重で実り多い体験になったものと思います。本学でも同様の取組を進めることができるよう、必要な準備を進めていきたいと考えています。